(Def. 1' Ā (h, azB {z, ay [y+axA (x, s)]})))

次に第三番目の定義 sādhyavad-bhīna-sādhyābhāvad-avrtti-vam と同じく Mathurānātha の注釈から、古派は sādhyavad-bhīna を sādhyābhāvat の限定者とする。この Mathurānātha の見解を否定し、sādhyavad-bhīna-sādhyābhāvat を第七格の tāpūrusa に理解する。これは 'samyogi dravyatvat' という論証において、第一番目の定義だけを解釈する samyogin の場所が実体であることも考えられるわけであって、そうなる理由が存在することになるのは vyāpiti に反するものとなる。つまり、Def. 1' の解釈も考えられることとなり、不合理であるから sādhyābhāvat が実体以外の場所つまり性質・運動等をなすために、第一番目の定義の前に sādhyavad-bhīna の部分が附加されたものになる。ここには実際の論証例より、sādhyā の集合と pakṣa の集合の範囲が等しいためにおこる欠陥を防ぐうとして第二番目の定義が述べられたと考えられる。この記号化は、内容上以下のようである。

Def. 2. Ā (h, ayB [y, axĀ (x, s)]))

なお、Goekoop 氏は定義の一番目と二番目に同じ記号化を与え、この定義の解釈として Mathurānātha の注釈中の古派の説を採用している。

この第三番目の定義 sādhyavat-pratyogikānyonyābhāvāsāmānādhikaranyam は、第五番目の定義 sādhyavad-anyaṅvrttivam とは共通の内容をもち、この Goekoop 氏 Stral 氏によれば、認められることである。ただ、Mathurānātha は第三番目の定義において第五番目の定義と同一内容ではなくと注釈しているが、実際上の注釈では同内容であると判断される。この第三番目と第五

番目の定義は相互非存在の内容をもち、Def. 1' の記号化と一致する。

最後に第四番目の定義 sakala-sādhyābhāvan-niṣābhāva-pratyyogitvam と同じく、最初の sakala という言葉は sādhyābhāvat を限定する役目を果している。この点他の四つのもとは異質であると言える。この論証の実例として、'etad-gñatvābhāvān palatvāt' というわけの vyadhikarānābhāva の論証があげられる。これは 'vipakṣa が布とどうただ一つの個物であるのび、ある限りの論証の対象の非存在の場所が認められず不合理であるから、'全づの』とすら限定をつくるのである。

Def. 4. (azB) [Ā (h, azB {z, ay [y+axA (x, s)]}))]

記号化の面から見ると、この四番目の定義が最も厳密なものとなる。

以上の如く vyāpiti の五つの定義の特徴を記号化によって明らかにしようとした。およそ五つの定義は非存在の区別に従って絶対非存在と相互非存在の二つに分けられ、各々例証を満足するように五つに分けられたと考えることができよう。

注 1 Vyāpitaṅcakarāhasyam of Mathurānātha Tarkavāgīśa with super-commentary of Śivadatta Miśra. Kashi. Skt. Series 64, p. 20

注 2 J. F. Stral, 'Correlations between Language and Logic in Indian Thought,' Bulletin of the School of Oriental and African Studies, 23 (1960), p. 115

注 3 C. Goekoop, The Logic of Invariable Concomitance in the Tattvachintāmani (1967), p. 32